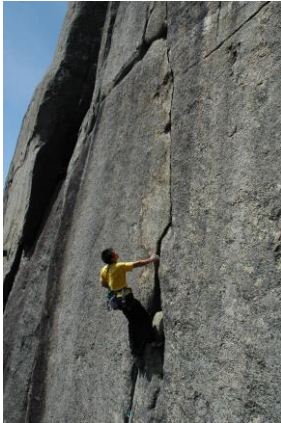


## 自然をリスペクトするのが

## フリークライミングです

菊地敏之さん



クライミングのことならこの人に聞きたい！ヨセミテからアルパイン、レスキュー、クライマーとしての身体作りまで、その著書を見るだけで、守備範囲の広さではこんなに頼りになるインストラクターはいないのではないかと思います。今回は菊地敏之さんに、自然との付き合い方をうかがいました。（インタビューと文：長晶子）

### ◆フリークライミングを意識したのはいつごろからですか？

—1970年代末から各地のゲレンデなどでアメリカのフリークライミングに影響されたクライミングが始まっていましたが、はっきり意識したのは、1980年の『岩と雪』正月号のジョン・バーガーの写真ですね。戸田直樹さんの記事と共に強い印象を受けたのを覚えています。小川山レイバックが登られたのが81年ですが、小川山創生期から「その道」一筋ですね。もう小川山も30周年になります。

### ◆フリー以前はどのようなクライミングをしていたのですか？

—高校生の時にベルニナ山岳会に入りましたから、いわゆる山岳会育ちです。大学に入ってから19歳でJCC（日本クライマーズクラブ）に入りました。鷹取山ではよく練習しました。剣岳チンネや谷川岳一ノ倉沢の冬季登攀など、アルパインクライミングに明け暮れていましたね。大氷柱もその頃登りました。

### ◆フリークライミングの魅力とは何でしょう？

—自然の岩を、自然の環境に手を加えたりすることなしに登るということに尽きます。

アメリカのヨセミテの近くにトラウミメドウズというクライミングエリアがあります。カシドラルピークという有名な岩があり、グレートにすごく難しい訳ではないので人気です。大勢の人が訪れますが、ここには1本のハーケンもボルトもありません。跡を残さないナッツ等を使いますが、トップにも下降用のボルト一本ありません。皆、登ったらクライムダウンします。人が去れば、自然はもとのそのままの姿なのです。

初登頂者のジョン・ミュアがそのように登ったので、その登り方を皆守っているのです。

初登の状態を変えないというクライミング哲学のようなものがあるのです。日本のクライマーはそういう努力しなすぎです。谷川岳一ノ倉沢南稜は、初登攀者の小川登喜男はハーケンを3本しか打っていないはずですが、その後どんどん打ち加えられ、ハーケンだらけのルートになってしまっています。日本中のルートが似たような経過を辿っています。私は、人工的に手を加えられた自然は汚らしいという印象を受けてしまいます。

それまでやっていた人工登攀はクライミングとは言えないと感じるようになりました。世界標準をヨセミテに見た、という気持ちになりました。今では、人工的なクライミングは面白くないし、自然に対して失礼だと思うようになりました。

- ◆『登山時報』（日本勤労者山岳連盟会報）に『山のカンキョーの話』を連載されていますが、環境を意識したきっかけは？

—初めてヨセミテに行ったとき、テントサイトのテーブルに、食器や飲みかけのコップを置いたままクライミングにでかけて戻ったら、テーブルに紙切れが置いてあり、すぐさま片付けないとキャンプ場から追放すると書いてありました。国立公園のレンジャーには逮捕権もあるのです。

トイレについても、大も小も必ず深さ30センチ程度の穴を掘り、川や水場、他の人が使った場所から30メートル以上離れること、紙は埋めずに焼くか持ち帰ることになっています。その作法だけでなく、キャパシティを考え人数制限もされています。ゴミを捨てる人は全くいないと言えます。

83年から92年まで『クライミングジャーナル』の編集長をやった後、『オペ冒険大賞』の事務局長をりましたが、このときのスタッフに動物植物専門学校の講師をやっていた人がいました。この人からいろいろ教えてもらったことも大きかったです。クライマー仲間環境にうるさい友人もいて、影響を受け、言い負けたくなくて、本も随分読みました。

- ◆『クライマーズボディ』など、フィジカル面からもクライミングにアプローチされていますね。

—骨盤骨折や膝の半月板損傷など、若いころから何度もケガをしてきました。リハビリ生活もそれなりに経験して、その中で他のスポーツ選手の人や専門家からいろいろなことを学んだわけです。安全のためにも、身体のメンテナンスを含めて、クライマーとして努力しなければならないことがあると考えました。これも自然と対峙するために必要なことだと思っています。

◆山の環境保護はどうあるべきだと思われますか？

—環境の議論は、深く考えると重くなってしまいます。昨日まで正しいと思われていた理論が今日はそうでないと言われることもあります。

でも、山に限って言えば、山ヤには言えることも出来ることもあると思います。『保存』か『保全』か、という論議も多々耳にしますが、自分の自然に対するアプローチはどちらかを考えてみることもしてみるとか。たとえば、ある国の国立公園では防水の靴を義務付けるそうですが、それは道の真ん中の水たまりを避けて歩くことで道脇の生態系を壊してしまうからだということです。これは『保存』の方法ですが、木道を作るのは『保全』でしょう。

日本の自然はキャパシティが大きく、だから「自然との共存」という言葉も出てくるのですが、原生の自然に対して我々は「侵入者」であるという意識になると、自然との接し方も変化して来るかもしれません。

◆自然をリスペクトし、自然に対してフェアであることがクライミングという菊池さん。登らせてくれてありがたいの「初心」を思い起こさせていただきました。